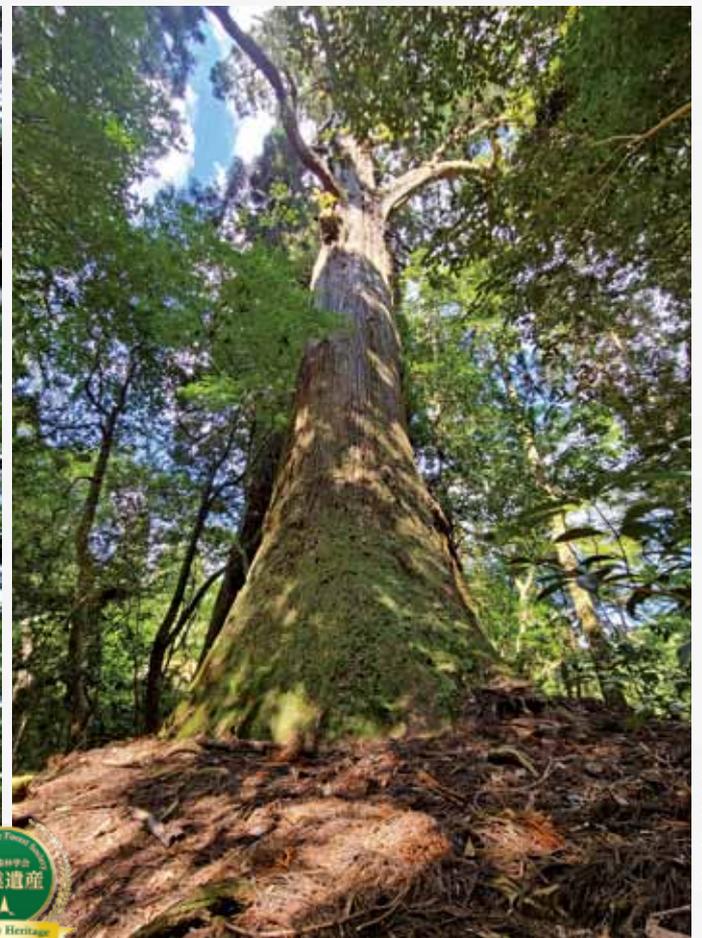


「小石原の行者杉」は、福岡県東峰村小石原皿山地区の標高500m～600mの国有林に生育する樹齢200～400年のスギが生育する林分です。1991年の台風で100本以上が一度に倒木する被害がありました。その前には、直径50cm以上のスギが1,300本以上ありました。現在、林野庁により行者スギ遺伝資源希少個体群保護林(10.09ha)として指定されており、とりわけ「行者杉の父」と称される樹齢600年、樹高52m、幹周829cmの「大王杉」の壮観な姿には驚かされます。その他、枝があちこちに突き出した異形の「鬼杉」などもあります。

この行者杉を語るためには、英彦山修験について語る必要があります。筑紫山地の東部、福岡県と大分県の県境に位置する英彦山は、奈良県の大峰山、山形県の出羽三山と並んで修験道の三大霊場の一つとして知られています。南北朝時代(14世紀終わり)には、英彦山地域で行者(山伏、修験者ともいう)による修業が行われていたといわれています。行者が修業のために入山することを峰入りといい、江戸時代には、英彦山では春峰、夏峰、秋峰が行われ、1ヵ月以上も山中で修業しました。春・夏峰では、英彦山から小石原を経て大宰府天満宮の鬼門(北東の方角)を護る宝満宮(宝満宮)神社までを往復し、走破距離は約130kmにも達したといわれています。白装束を身にまとった行者は、山中を歩きながら、地獄界、餓鬼界、畜生界、修羅界…といわれる十界修業を積み即身成仏(生きながら仏となること)を目指しました。9回目の峰入りでは、即身成仏となることが認められ、



行者杉(鬼杉)



行者杉(大王杉)

日本森林学会による

日本の林業遺産を知ろう!

第31回

こいしはら きょうじやしき
小石原の行者杉(2016年度 林業遺産選定)

東京大学 しばさき しげみつ
柴崎 茂光



英彦山遠景（左側の山容が英彦山、右下がスロープカーの花駅）



英彦山登拝の様子を描いた絵葉書（1921年）千葉県立中央博物館蔵



英彦山神宮（1920年）千葉県立中央博物館蔵



宝満宮竈門神社



行者堂と護摩壇

指導的立場としての大先達となることが許されました。その秘儀が行われた場所が、行者杉に囲まれた行者堂だったと伝えられており、行者堂を含む「修験道深仙宿」は、福岡県指定文化財となっています。このように行者杉が生育する地域は、英彦山修験における聖地でした。しかし明治期に入ると、状況が一変します。新政府が神仏判然令（1868年）、修験廃止令（1872年）などを布告したのです。それ以後、英彦山の修験道は、衰退の道を辿っていくことを余儀なくされました。

行者杉周辺には、実に多くの遺構を目の当たりに行われてきました。江戸時代には窯元経営者が行者杉の管理を行ったとの記録が残されており、行者杉の育林に関わっていた時代がありました。行者杉周辺には、実に多くの遺構を目の当たりにすることができます。林内には「従之西筑前領」「従之東豊前小倉領」と書かれた石碑が僅かな隙間を空けて背中合わせに立ち並んでいます。これは、国境石と呼ばれ、1700年頃の筑前藩と豊前藩の境界争いの末、決着した境界を示す石碑で28カ所現存しています。また行者堂には、御本尊として修験道の開祖として知られる役小角えんかくの木像が祀られています。さらに行者堂の周辺には、護摩を焚いた石組みの護摩壇跡、行者のほか、近隣住民が「お水もらい」にきた霊泉が湧き出る「香水池」など、修験の様子を体感できる遺構も残されています。

55年間、「小石原焼」に携わってきた太田孝宏さん（79才）にお話を伺いました。15年位までは、梅雨時期に皿山地区の人々で「行者参り」と呼ばれる行事が行われ、行者堂にお弁当を持ち寄り、おかずを交換しながら、お酒なども飲み交わし、親交を交わしたそうです。「行者参り」が行われなくなった現在でも、「行者様のお蔭で、火事もなく無事、窯（業）が行える」という感謝の気持ち、地区の人々に残っています。近年、衰退した英彦山修験を復活させようとする動きが活発化しており、宝満宮竈門神社と英彦山神宮を踏破する峰入りも復活しています。英彦山修験が見直される動きの中で、公的機関も地域住民と継続的にかわりながら、行者杉や皿山地区の歴史が再評価されることを望みます。

参考文献

- 小石原村編「小石原村誌 小石原村
チーム・N「宝満・三郡山系徹底踏査！」海鳥社
山伏文化財展示資料など